

【vol.54】マイナーキー実践編 ～その3～ マイナーのⅡ－Ⅴでのソロプレイ1

こんにちは、大沼です。

前回、前々回と、マイナーキーのツーファイブを題材に、ナチュラルマイナーとハーモニックマイナーの関係性を学んできましたね。

そしてそれらの概要と、知っておくべき重要なスケールポジションを覚えました。

と、言うことで、今回からはそれらを楽曲の中でどのように使っていくのか？、この部分を学んでいきます。

理論的な解説が多くなりがちですが、最終的にこれらの知識は、実際の演奏で活かしていくべきものですので、頭で理解するのと同時に、耳(聴覚)での理解も進めていきましょう。

ではまず、とあるコード進行の上でソロをとる、となった場合、(スケールの的には)大きく分けて以下のような3つの方法論が出てきます。

(1)、その曲のキーに対する基準スケールを使う。

(※ソロの進行の中に部分転調や特殊な代理コードなどが無い場合)

これは単純に、例えばCキーの曲ならば、CメジャーペンタやCメジャースケールを使い、Eマイナーキーの曲ならば、EマイナーペンタやEマイナースケールを使う、と言うような、そのキーの基準スケールを使って、それ一発でソロを弾く、と言う事です。

(2)、それぞれのコードにあわせた、コードトーンを狙う。

これは例えば、今、学んでいる $Bm7(b5) \Rightarrow E7 \Rightarrow Am7$ という進行があった場合、

Bm7(b5)の上では、コードの構成音である、
B音(root)、D音(m3rd)、F音(b5)、A音(m7th)を狙って弾き、

- ・E7の上ではE音、G#音、B音、D音、
- ・Am7の上ではA音、C音、E音、G音、

と、この様に、各コードの上で、それぞれのコードトーンを主に狙って弾く、と言う方法です。

(※どちらかと言えば、コードトーンを主体にメロディーを作っていく、と言う様な状態になります)

(3)、それぞれのコードにあわせた、モードスケールを使う。

これは例えば、CキーのⅡ－Ⅴ－Ⅰである、Dm7⇒G7⇒CM7と言う進行があった場合、Dm7に対してはDドリアン、G7に対してはGミクソリディアン、CM7に対してはCアイオニアン、と言ったように、各ダイアトニックコードに対応しているモードスケールを見てソロを弾く方法です。

ですがこれは、上記の例で言えば、それぞれのモードスケールの構成音は同じなので、結局、(1)のCメジャースケール一発で弾くのとそれほど変わらないですし、知識としては理解していても、実際の演奏中は、この様な事はほとんど考えていません。

ですが、上の例(CメジャーのⅡ－Ⅴ－Ⅰの様な単純な進行)とは違い、ソロを弾く進行の中で、部分転調や特殊な代理コードがある場合、この方法は有効になってきます。

例えば、今題材にしているAmキーのⅡ－Ⅴ－Ⅰ、Bm7(♭5)⇒E7⇒Am7と言った進行の場合、Ⅴ7であるE7の部分は、Amキーの基準スケールである、Aナチュラルマイナースケール準拠のコードではありませんよね？

このE7は前回、Aハーモニックマイナーのダイアトニックコードからもってきている、と言う事を学びましたが、これは要するに、Bm7(♭5)⇒E7⇒Am7の中のE7の部分だけ、ハーモニックマイナー系のモードになっているわけです。

なので、モードスケールの的に見ると、

Bm7(♭5) ⇒Bロクリアンスケール(=Aエオリアン、Aナチュラルマイナーと構成音は同じ)

E7 ⇒EHmp5↓スケール(Aハーモニックマイナーと構成音は同じ)

Am7 ⇒Aエオリアンスケール(=Aナチュラルマイナー)

と、この様に、使うスケールを切り替える必要があります。

さらに、この理屈を踏まえた上で、もっと単純化すると、以下の様に使うスケールを見る事もできたりします。

Bm7(♭5) ⇒Aナチュラルマイナースケール

E7 ⇒A ハーモニックマイナースケール

Am7 ⇒A ナチュラルマイナースケール

1つ前の例のように、コード1つずつに使うスケールを分けていくと、結構めんどくさい感じになりがちですが、こう見ると、同トニックの、ナチュラルマイナーとハーモニックマイナーを切り替えるだけ、とすることがわかりますね。

と、こんな感じで、それぞれのコードにモードスケールをあてていくのが、(3)の方法(ベースとする考え方)になります。

でも、実際にソロを弾いたり、作ったりする時には、上記の方法を使い分けていく、と言うよりは、その都度、割合を変えながら、3つの方法を複合的に使ってフレーズを成り立たせていく事が多いです。

さて、ソロプレイの大まかな方法論を押さえたところで、今学んでいる、AmキーのII-V-I、Bm7(b5)⇒E7⇒Am7に話を戻しましょう。

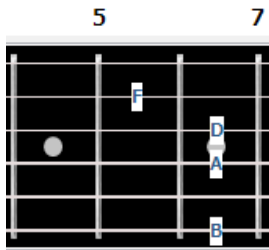
3つの方法論の部分でも少しお話ししましたが、この進行の場合、E7がAナチュラルマイナーのダイアトニックコードではないので、(1)の“そのキーの基準スケール(だけ)を使う”と言う方法は、使えないことになりますね。

(※弾く音を選んで、無理やりやろうと思えば出来ない事もないですが、その場合、結局、(2)や(3)の方法を使うのとほとんど同じような状態になります。)

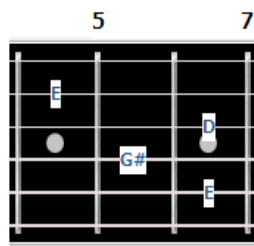
なので必然的に、(2)と(3)の方法を使う事になるのですが、今回は主に(2)の、それぞれのコードにあわせた、コードトーンを狙う、と言う方法を見ていきましょう。

まず、Bm7(b5)⇒E7⇒Am7という進行に対して、以下の様なコードフォームでヴォイシングをして行くとします。

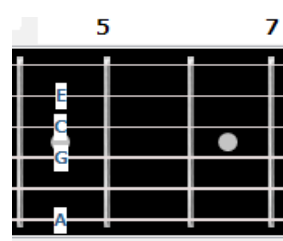
Bm7($\flat 5$)



E7

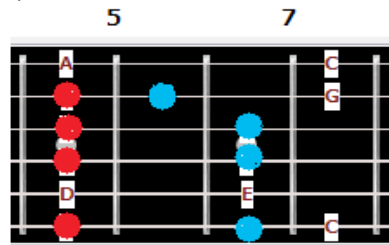
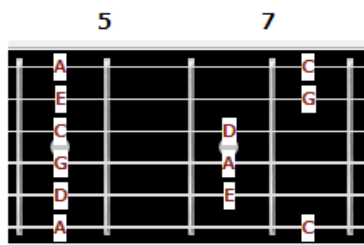


Am7



この時、Bm7($\flat 5$)と Am7 のコード上では、A ナチュラルマイナースケールや A マイナーペンタを使っても良いですし、今はコードトーンを狙う、と言う話なので、この指板図を見て、それぞれのコードトーンを狙っても良いですね。

※A マイナーペンタ上で見る、Bm7($\flat 5$)と Am7 のコードトーン的位置(一例)



もちろん、コードフォームの通りに○印をつけた場所だけではなく、音名が合っていれば、どの弦のどのフレットの場所でも、コードトーンとして使えます。

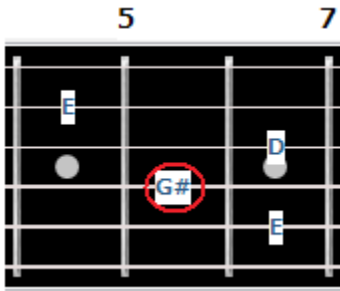
(※例えば1弦5フレットのA音を、Bm7($\flat 5$)の m7thとして見ても良いし、Am7 の rootとして見ても良い)

基本的には、その時バックで鳴っているコードのコードトーンを弾くと、音使いとしては安定したものになってきます。

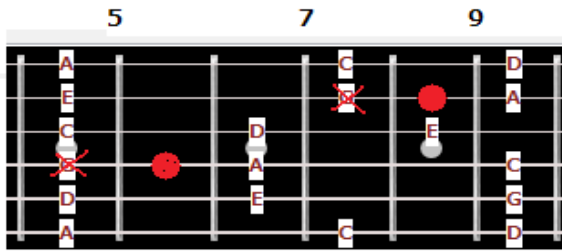
で、問題の E7 なのですが、M3rd に A ナチュラルマイナースケールには含まれていない、G#音が入っていますね。

そしてそれと同時に、E7(EHmp5↓スケール)の元々の拠り所である、A ハーモニックマイナースケールには含まれていない、G 音は使えなくなります。

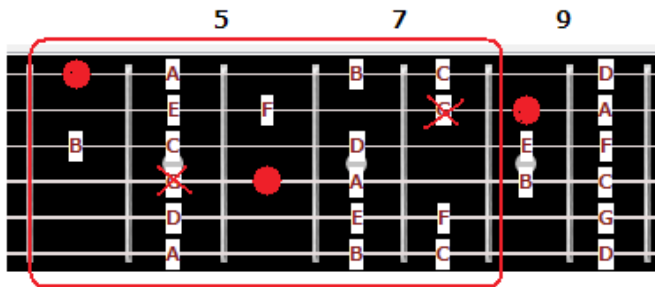
※E7



※A マイナーペンタから見た G 音と G#音



※A ナチュラルマイナーから見た G 音と G#音

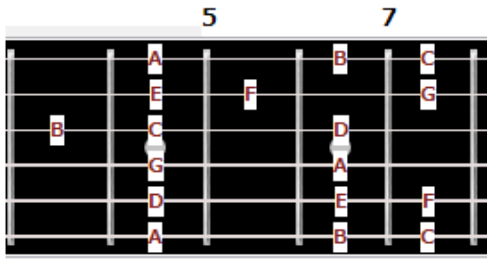


これらの事を踏まえると、Bm7($\flat 5$) \Rightarrow E7 \Rightarrow Am7 という進行の中では、

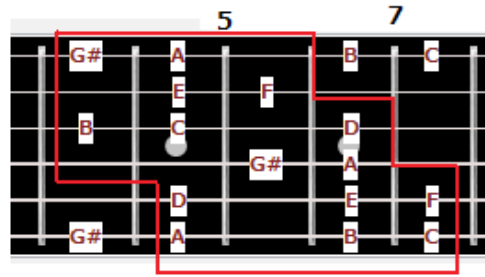
- Bm7($\flat 5$)と Am7 のコード上では、Bm7($\flat 5$)と Am7 のコードトーンを狙うか、
A マイナーペンタや A ナチュラルマイナースケールを使う。
(※もしくは両アプローチを複合的に使う)
- E7 のコード上では、E7 のコードトーンを狙うか、
A ナチュラルマイナースケールの G 音を G#音に変えたもの、
=A ハーモニックマイナースケール(=EHmp5 \downarrow)を使う

と言う事になりますね。

※A ナチュラルマイナー



⇔ ※A ハーモニックマイナー



そして E7 のコードトーンを狙う場合、A ナチュラルマイナーに含まれていない G#音を狙ったり、コードトーンとして重要な、B 音(P5th)を狙ったりすると、Am7 への解決感を強く醸し出すことが出来るのです。(※もちろん E 音や D 音を使っても OK)

では、それらの実例として以下の譜例を弾いてみましょう。

基本的に譜割りはあまり気にせずに、音を良く聴きながらゆっくり弾いてください。コードをジャランと弾いて響きを確認した後、単音の流れを聴いていく感じです。

譜例、Bm7(♭5)⇒E7⇒Am7

重要なポイントとしては、「Bm7(♭5)⇒E7」と「E7⇒Am7」のチェンジの際、G 音と G#音が切り替わった時に、響きがガラッと変わる所です。

そしてE7のところではG#音を弾くと、次に半音上のA音に解決したくなる、リーディング・トーン(導音)としての役割も意識しましょう。
(※導音に関しては、vol.52 で学びましたね)

さて、と言うことで、今回は以上になります。

今回の内容を踏まえて、コード進行のバックイングを録音したりして、色々ソロプレイの練習をしてみてください。

バックイングを録るものが無かったり、作るのが面倒な場合は、上の譜例のように、まずコードを鳴らし、その後に単音でのメロディーを弾き、また次のコードに移って同じ事をする、と言う、ソロギター的な練習法でも構いません。

それぞれのコードに対応することや、スケールの切り替えが出来る事も重要ですが、まずはマイナーのII - V - Iにおける、ハーモニーの切り替わりを感じてください。

では、次回に続きます。

ありがとうございました。

大沼